

客観的ということを考えるために

槇野 沙央理 (Saori MAKINO)

千葉大学大学院人文社会科学研究所

本発表は、ワークショップ「多元的・ネットワーク化の世界に求められる知の枠組み」における提題の一つである。この要旨では、①ワークショップの題目のもとで考えられる発表者の問題意識と、②その問題意識に沿って発表を行うために設定される問いについて、本発表の題目と関連させながら説明する。

現代では、学問はそれぞれの分野・領域が高度に専門化し、ある分野の（しかもその中でも特定の領域の）専門家でなければ、キーワード・式など言語によって表わされる知識に限っても、ある知識を紐解いていくことは困難になっている。例えば哲学でも、特定の著名な哲学者のテクストを取り扱う研究において、何が成果であるのか、そもそもあることがどんな意味で成果と呼ばれるのかが、専門家以外の研究者にはわからないということがあろう。

もし、個々の知識がそれぞれ孤立した状態で放置されるとすれば、もっと言えば、ある知識と別の知識との間にどう関係を生成させるかを見つける方法が形成されなければ、もはや「学問」という言葉で統一的に語るができるような営みなどない、そこには連帯などない、ということになってしまわないだろうか。この場合、特定の分野の興隆ということはあるとしても、特定の分野の興隆によってもたらされる知識の恩恵を受けるのはごく一部の人たちだけということになり、結果として研究者たちの関係を説明する原理は「競争」——他の分野・領域よりも自身のそれが発展することが望ましいという考えだけになってしまいかねない。

私たちが、まずはせめて哲学者の間だけでも、「競争」だけではなく「連帯」の関係を結ぶためには、特定の分野・領域の興隆が他のものに対しても知識の恩恵をもたらすことを見てとりやすくする手法が必要である。もっと言えば、ある知識がどのような仕方であるのかを、専門家でなくとも（専門家の協力を借りながらも）分析することができる手法が必要である。そうした手法があれば、私たちは、天下り式で権威的に決められた基準を強制されることがなくなり、何がどのような意味で成果であるかを考えることが容易になるだろう。

以上が、ワークショップの題目のもとで考えられる発表者の問題意識である。この問題意識に沿って発表を行うために、ある問いの群れを設定したいと思う。それは、私たちがしばしばある知識を取り扱う際に問題とする、「客観性」ということに関わっている。

私たちは、学問の場に限ったとしても、さまざまな契機で・さまざまな動機に基づいて、さまざまな仕方である客観性を問題にする。つまり、客観性を問題にするそれぞれの場合に個別のありようがある。よって、客観性を問題にするといっても、それぞれの場合の個別のありようを認める（受け入れ、吟味していく）のでなく

れば、客観性を問題にすることがなんであるかについて語ったことにはならないだろう。

学問の場において、客観性を問題にするということは、一見すると自明なことであるように思えてしまう。それは、一方で、他者の吟味に耐え得るということが学問の成立要件であると考えられるからである。しかしながら他方、他者の吟味に耐え得るということを（これを要求することがしばしば好ましい結果を招くとしても）、当然とみなすことの弊害も考えられる。例えば、他者の吟味に耐え得るということで、ある主張が受け入れ可能であるかどうかを吟味する際に、当の主張が行われるプロセスがオープンになっているかどうか（知識の側に検証を受け入れる態勢が準備されているか）ということを考えるとする。この場合、他者の吟味に耐え得るということを当然のこととみなすならば、以下の三つの問い（先に「ある問いの群れ」と言ったもの）——A. 客観性を問題にするとは何をすることか（手続きの明示化）、B. 客観性を問題にするのは何を要求するときか（動機のあるぶり出し）、C. 客観性を問題にすることで何ができるか（成果の追求）が探求されないままとなる。もしこれらの問いを問わなくともよいものとして扱うならば、私たちは、「客観的」ということの内実を明示しなくともよいという決断をすることになり、結果として、ある知識を紐解くための何らかの基準を権威的に設けることになる。これにより知識は孤立し、他の知識とどう接続するかを模索する中で他の知識と互いを豊かにしあう連帯の機会を奪われるのである。

もし、これら三つの問いを探求する手法が、その骨子だけでも得られるとすれば、客観性を問題にするということがどのようなことであるかを（その暴力性も含めて）示すことができるだろう。またこれにより、ワークショップの題目のもとで考えられる発表者の問題意識——ある知識を紐解いていく土台を得ること——に対しても、実際にその手法形成（知識同士の連帯に寄与する手法とでも呼ぶべきもの）を行うという仕方で答えたことになるだろう。

具体的な手法形成に際しては、ウィトゲンシュタインの遺稿『確実性について』（以下では『確実性』と呼ぶ）を活用する。ウィトゲンシュタインの『確実性』とは、ムーアの論文に触発されて書かれた最晩年の遺稿であり、「知っている（wissen）」ということを中心として、人が何かを確かであるとみなすことがどんなことであるかを考察している。発表者は『確実性』を、私たちが日常的に当然のこととみなしていること、疑うことなく依り頼んでいることがあり、そうした頼もしい知識とでも呼ぶべきことがどのように生成しているかをあぶり出すテキストとして読む。これにより、知識がいかに知識として成り立っているかを分析し、知識同士の連帯に寄与する手法を形成してみたいと思う。

参考文献

Wittgenstein, L. (1984) *Bemerkungen über die Farben; Über Gewißheit; Zettel; Vermischte Bemerkungen*, Frankfurt am Main: Suhrkamp. (邦訳は、『確実性の問題：断片』、黒田亘・菅豊彦訳、大修館書店、1975年。)